

令和8年度大谷場中学校だより



# おおやば

## 第4号

令和8年6月30日(火)発行

学校教育目標

「より高く、より広く、より深く、より強く」  
自立・共生・錬成

さいたま市立大谷場中学校

〒336-0016 さいたま市南区大谷場 2-13-54 TEL.882-9962

HP: <https://oyaba-j@saitama-city.ed.jp/> MAIL: [oyaba-j@saitama-city.ed.jp](mailto:oyaba-j@saitama-city.ed.jp)

## 初心忘るべからず

校長 山口 泰由

6月11日から13日にかけて、3年生とともに京都・奈良への修学旅行に行ってきました。私自身、3年担任をしていた頃からすでに10数年、久々に訪れた古都の様子には、かなり驚かされました。「どこに行っても外国人観光客が多いこと」「鹿せんべいの価格が200円に値上がりしていたこと」「京の台所と言われた錦市場が串焼きを中心とした観光色の強い市場へと変化していたこと」など、時代の移り変わりを強く感じました。道中、傘を開く機会はほとんどなく、むしろ暑さの中での3日間となりましたが、3年生はそれぞれが係活動等の役割に対して、責任をもって行動することができ、最終日、満足そうな表情で「楽しかった」と語る姿が大変印象的でした。

このような旅の中で、私自身も大きな学びを得ることができました。2日目の夜、大江能楽堂での能楽鑑賞の際、私は代表生徒とともに舞台上がり、能面を体験させていただきました。もちろん初めての経験でしたが、「般若」の面をつけた瞬間、歴史の重みをとともに、普段感じることのできない緊張感を感じました。また、ほぼ正面しか見えない視界の狭さにも驚きました。客席から見ていた3年生には、少し滑稽な姿に映ったかもしれませんが、何をすればよいのか分からず、ただ背筋を伸ばして立つことしかできませんでした。あの限られた視界の中で、堂々と舞う能楽師の方々の姿を想像し、伝統芸能の凄さを改めて実感することができました。

そして最後、解説の方が「初心忘るべからず」という言葉についてお話してくださいました。これは室町時代、能楽を大成した世阿弥が残した言葉です。現在では「物事を始めた頃の新鮮な気持ちや意欲を忘れてはならない」という意味で用いられることが一般的ですが、本来の意味はやや異なります。「人は一生の中で新たな段階へ進むたびに、再び未熟な自分(=初心)と向き合うこととなります。現状に満足することなく、その未熟さと向き合い、常に新しい自分に挑戦し続けることが大切です。」とおっしゃっていました。私は、埼玉に戻り、この言葉について少し調べてみました。

世阿弥の「初心」は、若い頃の未熟な芸や、年齢ごとの芸の初めての境地を指しており、芸の向上をはかるものさしとしてこの初心を忘れてはいけないというのです。

世阿弥は、この教えを3つに分けて説きます。まず「是非(ぜひ)初心を忘るべからず」といい、若い頃の未熟な芸を忘れなければ、そこから向上した今の芸も正しく認識できるとします。次に「時々(ときとき)の初心を忘るべからず」といい、年盛りから老後に至るまでの各段階で年相応の芸を学んだ、それぞれの初めての境地を覚えていることにより、幅広い芸が可能になるとします。最後に「老後の初心を忘るべからず」といい、老後にさえふさわしい芸を学ぶ初心があり、それを忘れずに限らない芸の向上を目指すことを説くのです。

「文化デジタルライブラリー 著作権:独立行政法人日本芸術文化振興会」より一部参照

さて、1学期もいよいよ「まとめの時期」を迎えました。4月当初の緊張感も少し和らぎ、学校生活にも良くも悪くも「慣れ」が出てくる頃です。そんな時こそ、「初心忘るべからず」の精神です。「慣れた」と感じたときこそ立ち止まらず、次の新たな段階へと挑戦するよい機会です。

進路選択に向け、より一層学習に向き合う3年生、部活動も新チームになり、学校の中心となりつつある2年生、中学校生活に慣れ始めてきた1年生。それぞれの学年が、それぞれの立場で新たな課題や壁に直面していることと思います。その壁は、皆さんが成長し、次の段階へ進んだからこそ見えてきた「新しい初心」です。新しいことに挑戦するときには、うまくいかないこともあるでしょうが、その経験こそが成長につながります。「まずはやってみよう」という新鮮な気持ちで、もう一歩前に進んでほしいと願っています。さて、この夏休みを皆さんはどう過ごしますか。